

特集 透析医療における情報技術の進歩・展開

Editorial

峰島三千男*

慢性腎不全患者にとって透析医療は必要不可欠な治療である。一方、その治療パターンは画一化されており、他の治療に比べて管理しやすい特性を有している。患者や装置から得られる情報もパターン化されているがゆえに解析しやすく、有効活用が可能である。本特集では透析医療に関連する最新の情報技術に焦点を当て、その進歩や今後の展開についてまとめた。

1. 透析装置・機器からのデータ活用

現在、臨床で使用されている透析装置や周辺機器からは膨大なデータが発信されている。しかしながら、異なるメーカーの装置情報を一元管理するには共通プロトコルの策定が重要である。また、透析部門システムと電子カルテとのリンクは透析医療の合理化を飛躍的に促進させる。本特集ではそれらの現状と将来展望について触れていただいた。

2. モニタリング技術の発展

センサ技術などの急速な発展に伴い、種々の患者情報の連続モニタリングが可能となってきた。循環血液量、体液量に加え、最近では患者血流量や透析量モニタリングも開発され患者の病態をほぼリアルタイムで把握することが可能となってきている。その最前線の動向を専門の先生方に執筆いただいた。これらのモニタリング技術がさらに充実していけば、1人ひとりの患者に対し、急激な血圧低下などのイベントを未然に防ぎつつ、適正な状態にナビゲートする透析の実現も夢ではないと思われる。

* 東京女子医科大学臨床工学科



3. 透析版ビッグデータの活用/災害時のデータ管理

透析は black box な治療といわれて久しいが，医学的エビデンスを表す種々の臨床研究が近年実施され，その有用性が次第に明らかとなってきた。また，一般社団法人日本透析医学会から毎年公表される統計調査報告は透析版ビッグデータの一つであり，日本の透析患者に関する多くの有用な知見が示されている。一方，大震災やその他の災害を経験して，透析医療における災害時情報ネットワークや患者データ管理に関する基盤技術がすでに構築されている。これらの最近のトピックスについて，中心的な役割を果たされてきた先生方にご執筆いただいた。

情報はそれを駆使して初めて活かされる。本特集が今後の透析医療の一助となれば幸いである。
